

一橋大学一橋学会編集

ISSN 0018-2818

一橋論叢

十一月号

論説

新国際経済秩序の基本問題……………小島 清(一)

キートンにおける魂ということ……………菊池 直(三)

原子力発電の発展……………井出野栄吉(四)

一九三〇年代以降のシンクレア・ルイス……………斎藤忠利(五)

資本主義的生産の総過程と「費用価格と利潤」……………松石勝彦(六)

現代経済学への若干の疑問……………美濃口武雄(七)

——「資本論」第三巻第一章を中心に——

コミンテルンの日本像(一九二九—三二年)……………加藤哲郎(八)

——「世界綱領」と「三二年政治リポート草案」——

資本の前貸と貨幣の前貸に関する一考察……………木村二郎(三)

研究ノート

公債と所得分配について……………馬場 義久(二)

—— 巨視的分配論との関連で ——

日本評論社

昭和五十五年十一月一日発行
 昭和五十五年十月一日印刷
 昭和五十五年九月一日発行
 昭和五十五年八月一日発行
 昭和五十五年七月一日発行
 昭和五十五年六月一日発行
 昭和五十五年五月一日発行
 昭和五十五年四月一日発行
 昭和五十五年三月一日発行
 昭和五十五年二月一日発行
 昭和五十五年一月一日発行

第八十四巻 第五号 (通巻 四八二号)

THE HITOTSUBASHI REVIEW

VOLUME LXXXIV November 1980 NUMBER 5

Articles

Basic Issues in a New International Economic Order…………… Kiyoshi Kojima 1

"Soul" in Keats…………… Wataru Kituchi 21

Growth Grounds of Nuclear Power Generation…………… Eikichi Ideno 40

Sinclair Lewis in the 1930's and Thereafter…………… Tadatoshi Saito 57

On Cost-price and Profit…………… Katsuhiko Matsushita 74

Some Questions about Contemporary Economics in Relation to Keynes' Economics…………… Takeo Minoguchi 91

The Image of Japan by Comintern (1929—31) ——"Worldprogram" and "1931 Draft-Thesis" of JCP——…………… Tetsuro Kato 109

A Study on the Advance of Capital and of Money…………… Jiro Kimura 127

Note

Public Debt and Income Distribution…………… Yoshitisa Baba 145

Edited by
 THE HITOTSUBASHI GAKKAI, HITOTSUBASHI UNIVERSITY
 Kunitachi, Tokyo

Published Monthly by Nippon Hyoronsha, Tokyo
 Price 810 YEN

ND 07605-11

(38) ロバートソン、安井、熊谷訳『貨幣』二〇九頁。
 (39) ハリス編、日本銀行調査局訳、前掲書、二八四頁。
 (40) H. Roy Weintraub, "Uncertainty" and the Key-
 nesian Revolution, *HOPR*, 1975, Vol. 7, No. 4, p. 530.

(41) Weintraub, *ibid.*, p. 546.
 (42) Weintraub, *ibid.*, p. 546.

(一橋大学教授)

コミンテルンの日本像（一九二九—三二年）

——「世界綱領」と「三二年政治テーズ草案」——

加藤 哲郎

(109) コミンテルンの日本像（一九二九—三二年）

小論は、近く発表する予定の別稿『三二年テーズ』の周辺と射程——コミンテルンの『中進国革命論』（仮題）の前提となりまた相補うものとして、『単一世界政
 党』であったコミンテルンが、一九二八年九月の「世界
 綱領」採択（第六回世界大会）を機に、わが国について
 のそれまでの見解（日本支部「日本共産党に与えた「二
 二年綱領草案」→「二七年テーズ」のブルジョア民主主
 義革命戦略）を改め、「三二年政治テーズ草案」に定式
 化される「ブルジョア民主主義的任務を汎汎に把握せる
 アロエタリア革命」の戦略を構想するにいたる背景を、
 コミンテルン自身の側から検討するものである。周知の
 ように、この「政治テーズ草案」は、一九三〇年夏のフ

ロフインテルン第五回大会のころ、モスクワのコミンテ
 ルン東洋部のヤ・ゾルクによって起草された日本問題
 についての草案を、風間文吉が三〇年一〇月の帰国にあ
 たり口頭で伝授され、風間の帰国後再延された日本支部
 「日本共産党中央委員会により三二年四月の『赤
 旗』紙上に発表されるものであるが、このころには既に
 コミンテルン自身の側は、わが国についての戦略を、翌
 年の「三二年テーズ」に定式化される「社会主義革命」
 の強行的転化の傾向を持つブルジョア民主主義革命へ
 と転換し復帰しつつあることになる。小論が扱うのは、
 その前段階としての、何ゆえにコミンテルンは、一時的
 にしろ、わが国にアロエタリア革命戦略を与えるにいた

たのか、という問題である。

(1) 拙稿「ミンデルンの綱領問題—世界政党とイデオロギーの統合」(14) 名古屋大学『法政論集』第八〇—八三号、所収、参照。

(2) こうしたミンデルンの日本問題についての基本資料については、さしあたり、山辺健太郎編『現代史資料』第一四巻、みすず書房、一九六四年、参照。

(3) この過程については、さしあたり、五十嵐仁「戦前日本における革命戦略の形成—『三二年テーゼ』作成に至る経過と背景」『法政大学大学院紀要』第三号、参照。

「一「中進国」としての日本像

一九二〇年代後半から三〇年代はじめにかけて、わが国論壇では「戦略論争」とよばれる学問的に政治的ない論争が展開された。よく知られているように、野呂栄太郎や雑誌『マルクス主義』『プロレタリア科学』に集う理論家たちが、ミンデルン日本文部日本共産党のいわゆる「三二年綱領草案」や「二七年テーゼ」に依拠してマルジヨア民主主義革命(二段)戦略を主張したのに対し、猪俣津雄ら「労農」グループが、二七年テーゼの独特な解釈にも依拠して社会主義革命戦略を

主張した、かの論争である。

この論争に一石を投じたのは、一九二八年九月一日、ミンデルン第六回世界大会最終日に採択された「共産主義インタナショナル綱領」(「世界綱領」)の第四章第八節「プロレタリアートの世界独裁のための闘争と革命の基本類型」に定式化された、革命類型論であった。それは、プロレタリアートの独裁へ移行する条件として、世界主義経済発展度を主たるメルクマールとして、世界各国を、①先進国(アメリカ、ドイツ、イギリス、等)、②中進国(スペイン、ポルトガル、ポランド、ハンガリー、バルカン諸国、その他)、③従属国(アルゼンチン、ブラジル、等)、④植民地・半植民地(中国、インド、等)⑤超後進国(アフリカの一部、等)に区分し、①について「プロレタリアートの独裁への直接の移行」、②③④について「反封建反帝マルジヨア民主主義革命」、⑤について「プロレタリア独裁諸国の援助による「非資本主義的發展」という戦略を提示した。ところが、②中進国については、当初の草案(ハーリン起草)では「一九二七年までのロシア、ポランド、その他」プロレタリア民主主義革命の社会主義革命への成長転化」と

「来るべき日本のマルジヨア・デモクラシー革命」は、中東の、資本主義発展段階の国々、植民地及び半植民地諸国における「マルジヨア・デモクラシー革命」とは次の事実によってその趣を異にするものである。即ちプロレタリアートが、地主との政治的同盟において覇権を握る帝國主義的マルジヨアジとの激烈なる正面衝突における指導勢力としての(変)革を遂行するといふこと及びこの変(革)が必ずや急速に実際にいってほわがプロレタリア「革命」の燃焼を意味する程急速にプロレタリア「革命」に転化する。……日本はプロレタリア世界「革命」の發展過程におけるマルジヨア・デモクラシー「革命」の独特な型を成すものである。」

しかし、このような「独特な型」規定は、ミンデルンの「世界政党」としての性格と、「現代の『共産党宣言』」とまで自讃された「世界綱領」についてのコミンテルン側の位置づけからして許されるわけはなく、ミンデルン滞在中の佐野は「日本革命」性質二付テ、「ブルジョア」民主主義革命ト云フ見地ニ余リ捉ハレ過ギテ居ル日本革命ハ「プロレタリア革命トシテ発シ、其革命途

界綱領」を基準とする新たな戦略作成に入っていた。そして、両派によって共に日本は「中進国」と認められたわけであるが、「世界綱領」で「中進国」として例示されていた諸国——「スペイン、ポルトガル、ポーランド、ハンガリー、バルカン諸国」——の共産党は、二九三〇年にかけて一斉に戦略再検討を行ない、ほとんどの国で「中位b型」戦略を「選択」する。わが国の「三一年政治テーゼ草案」も、実はその一環なのであった。

(1) 以上について、前掲拙稿「ミンテルンの綱領問題」特に四、四九四—五〇一頁、参照。また、K. H. Zick, *Die internationale (im folgenden KI), IX, Jg. H. 42 (17. Okt. 1928), S. 2561*. 原文は『現代史資料』第一四卷二九六頁の伏字をドイツ語テキストから抽った。傍点、引用者。

(2) Kato: *Hinge politische und organisatorische Aufgaben der KP. Japans, in, Die Kommunistische Internationale (im folgenden KI), IX, Jg. H. 42 (17. Okt. 1928), S. 2561*. 原文は『現代史資料』第一四卷二九六頁の伏字をドイツ語テキストから抽った。傍点、引用者。

(3) 佐野孝第一〇回審問録(一九三〇年一月二四日)、『現代史資料』第二〇卷、二七一—二七二頁。

(4) 同右第九回審問録(三〇年一月二三日)、同右書、二五〇—二五一頁。同第二回審問録(三〇年一月二七日)

程ニ於テ「プロレタリア」民主主義的任務ヲ解決スル可能性ガ多ク「プロレタリア」革命ト云フ觀察点ヲモツト強ク持タナケレバナルス、即ち「中位b型」であるとして、「コミンテルン」同志カラ屢々忠告サレシることになる。そして、彼自身も、三〇年一月には、「私ハ「コミンテルン」綱領草案ノ討議ヤ綱領成文ヲ参照シテ考ヘテ結果、日本はポーランド革命と同様に「中位b型」であるという見解に到達したことを、⁽¹⁾「予案」⁽²⁾の附録ニ於テ答ヒテ答ヒて居る。

この問題——「ミンテルン」の革命五類型中の日本の位置——に早く注目したのは、猪俣津南雄であった。猪俣は、一九三〇年三月の論文で、「比較的最近にわれわれが手にした重要な一文獻は、プロレタリア戦略論の中心問題の上に多くの光を投ずるものである」として、その文獻「世界綱領」の革命類型論に言及し、日本を「中位b型」だとする。

「プログラム」は、スペイン、ポルトガル、ポーランド、ハンガリー、バルカン諸国といふがどきものによって代表される「中位の資本主義崩壊階」の諸国のある者においてさえ、「プロレタリア民主主義的性

質の広範闊の諸任務を伴うところの、プロレタリア「革命」……の存在を認めている。……これは、農業における半封建的諸関係の残存の著大なることや、国家・政治機構における封建的残存物のあることによつて直ちに、当面の(革命)段階を「プロレタリア民主主義(革命)」の段階と考へることのいかに誤れるかを決定的に示すものである。⁽³⁾

これに対して、同じころ、「プロレタリア科学」の側は、「二七年テーゼ」の「プロレタリア民主主義革命」を金科玉条として、「世界綱領」を解釈する。

「思ふに、我國に於けるソレを広く、世界的に分類するとすれば、謂はば、比処(「世界綱領」)で云つてゐる『前者』の範疇(「中位a型」)に入れて考へて差支えないであらう。『崩壊派』の「戦闘的マルキスト」論者諸公は、上掲文に云ふ、後者(「中位b型」)の風のものとして……ソレを主張してゐる。」⁽⁴⁾

しかし、わが国において、両派が共に「国際的権威」に依拠して「二七年テーゼ」と「世界綱領」を結びつける解釈論争を展開していたころ、当の「国際的権威」⁽⁵⁾「ミンテルンの側は、「二七年テーゼ」を再検討し、「世界

日、同右書、二八一頁。また、「プロレタリア科学」臨時増刊、一九三一年一月、五二—五三頁をも参照。

(5) 猪俣「プロレタリア戦略論」その中心問題を究明す(『中央公論』一九三〇年五月)、『板橋左翼論』日本人戦線、而立書房、一九七四年、二五頁以下。傍点、引用者。なお、社会経済研究所編『日本民主革命論争史』伊藤書店、一九四七年、七三頁以下、をも参照。

(6) 横瀬毅八(対馬忠行)「プロレタリア民主革命に於けるプロレタリアートの社会主義的任務に就て——我國に於けるその特殊性」、『プロレタリア科学』一九三〇年三月、一—二頁。なお、佐野毅佐「ロシアに於けるプロレタリア民主主義革命の「プロレタリア革命」の転化の過程」、『プロレタリア科学』一九三〇年一月、四〇頁以下、をも参照。

二 「中進国」における「中位b型」の擡頭

——ポーランド、ハンガリー、バルカン諸国の場合

「世界綱領」は、「ミンテルン」において、「帝国主義とプロレタリア革命の時代における『共産党宣言』」「革命的階級闘争の勝利の科学」などと自画自説された。それは、一九二二年に問題が生起してから二八年九月の

リア革命略は確定しており、「中位b型」の典型で
あつた。⁽²⁾
しかし、ポリアンド共産党内の多数派(右派、ワレ
キ、ワレツキ、コストラツエザフ、フラントラ)と少数
派(左派、レンスキ、リシクら)の対立が、ソ連邦共産
党内のフハインクスターリンの対立にまぎまぎ、レ
ンスキ指導部が確立されていく一九三〇年の「右翼的
偏向との闘争」過程で、旧多数派(右派は、二〇年代半
ばのブルジョア民主主義革命戦時時代の「残滓」を浴び
たものとして批判され、「フハインクスターリンの革命の民
主主義的發展の綱領」を実現しようとして試みているかのよ
うな小ブルジョアの役割に関する未だ克服されてい
ない見解⁽³⁾ゆえに失脚していく。こうして、一九三〇年
九月のポリアンド共産党第五回大会は、一九二一年に総
人口の七六%、三〇年代にもなお六三%が農業に従事し、
西ウクライナ、西白ロシアの農業問題・民族問題をもか
かこんだこの中で、「中位b型」戦略を確定し、それ
にもとづく「綱領草案」を提示した。⁽³⁾

採択にいたる全時期をフハインクが主導してきたもので
あつたが、採択直後の「右翼的偏向との闘争」でフハ
インクが失脚して後も、二九年二月のスターリン五〇歳
の誕生日を機に「共産主義インクスターナル綱領」の作成
に対する同志スターリンの指導的役割と直接的参与⁽⁴⁾と
いう「歴史の偽造」がおこなわれることにより、「権威
を保ち、ソ連邦共産党第一六回大会(一九三〇年六月七
月)のころには、世界の三カ國語に翻訳され、レーニ
ン起草のソ連邦共産党綱領(一九一九年)さえ、この
「世界綱領」にもとづき改訂されようとしたのであつた。
したがって、「世界綱領」に定式化された革命類型論
が、各支分部(各国共産党)を拘束し、その旧来の戦略方
針の再検討をうながしたのは当然であつた。そして、そ
の再検討の方向は、当時のミンテルンの「第三期革命
的高揚」論にもとづく「社会フハインクスターリンとの闘争」戦
術に誘引され、「左翼主義と図式主義」を強化する方向
であつたこともいふまでもない。「先進國」における典
型例は、イタリヤ共産党における「リオン・チーゼ」の
廃棄——「労働者農民委員会にもとづく共和戦」とい
う「中間的解決」から、「直接プロレタリア独裁」へ

九年)に、バラツクを首班としたハンガリー・ソヴェ
ト共和国を短命ながら樹立した経験を持つ。一九年革命
の敗北後、共産党は一時解体し、二五年八月の再建第
一回党大会以後、かつてのハンガリー革命が労働同盟の基
礎を持ちえなかつた教訓をもとに、「労働者農民政府を
先頭とした共和国」のフロロガンをかかげてきた。⁽⁵⁾
当時のハンガリーは、大土地所有を残し数百万の零細
農・土地なし農民を抱え総人口の半数が農業に従事す
るホルネイ共和政(プロレタリアン政権)下で君主制國家であり、第
六回世界大会議場でもとりたてての討論もなくハンガリー
が「中進國」と例示された時、かのG・ルカーチは、
「第六回世界大会で採択された『世界綱領』は、ハンガ
リーを、きわめて正当にも、プロレタリア革命への移行
に際して民主主義的独裁が決定的な役割を演ずるような
國家のひとつに加えている」と「中位a型」としての解
釈を示し、いわゆる「ブルム・チーゼ」を執筆した(二
八年末)。⁽⁶⁾
しかし、この「ハンガリー中位a型」という「ブル
ム・チーゼ」の解釈は、ハンガリー共産党在外指導部と
ミンテルン執行委員会から激しく反撥される。二九年

(一九二九年)——であつたが、「中進國」において、
その「左翼主義と図式主義」は、一九二九年一月三年春
にかけて、ほとんどの國々の共産党が、二八年以前の戦
略路線を清算し、「中位b型」即ちプロレタリア革命論
を採用する傾向として現われる。いうまでもなく、わが
國の「三一年政治リゼ草案」もその一環であつた。以
下では、「世界綱領」で「中進國」と例示された諸國に
ついて、それぞれを略述する。
「ポリアンド」ポリアンド共産党の戦略問題は、第六
回世界大会議場での「中進國」討論の中心であり、ポ
リアンドが、①社会主義ソ連邦や「先進國」ドイツの隣國
であること(「フハインク」)②「封建遺制」が「一九一
七年までのロシア」に比すれば強大でなく、農業資本主
義化が進んでいること(多数派フハインク、少数派リシク、
ドイツ共産党フハインク)③「ピルツキ独裁は、「民主主
義段階からフハインクスターリンに到達してあり、フハインク
はプロレタリア独裁が対置されるべきこと(フハインク)」
などの理由により「中位b型」とされたことが、そもそ
も「中進國革命」戦略をa型とb型とに分岐させた発端
であつた。この意味では、すでにポリアンドのプロレタ

(5) B. レイアンス/K. シリーニ+ (石堂消倫訳) 『現代革命の理論—ミンデルンの政策転換』合同出版
 一九六六年、五八—五九頁。
 (6) 前掲拙稿『ミンデルンの綱領問題』(四) 五〇頁以下。
 (7) 同右、特に(三)の二三頁以下、参照。
 (8) ZK d. KP. Polens, *Inprekorr.*, 9. Jg. Nr. 59 (9. Juli 1929), S. 1422-23.
 (9) *Inprekorr.*, KI, 當時のポ—ランド関係論文の他、M. K. Dziewanowski, *The Communist Party of Poland*, 2. ed., Cambridge 1976. J. B. de Weydenthal, *The Communists of Poland*, Stanford 1978. J. トイツ+「兩大戦間期におけるポ—ランド共産党の悲劇」山西英一・鬼塚豊吉訳『レーニンとポ—ランドの他』岩波書店、一九七二年。H. Seton-Watson, *The East European Revolution*, London 1950. G. D. Jackson, Jr., *Comintern and Peasant in East Europa 1919-1930*, New York/London 1966.
 (10) *Die Kommintern vor dem 6. Weltkongress*, Hamburg 1928, S. 262. M. Mohar, *A Short History of the Hungarian Communist Party*, Boulder 1978, p. 28.
 (11) 英国王室国際問題研究所編(仙波太郎訳)『ベルカンの政治経済』消和書店、一九三九年、二五頁以下。矢田俊隆『ヘンクリ、チエニコソフキテ現代史』山川
 卷「一九〇頁」。Protokoll der Konferenz der Erweiterten EKKI, Hamburg 1923, S. 283 (同上「四」三頁)。
 (22) 前掲拙稿「四」一六三—一六四頁。
 (23) J. Rothchild, *The Communist Party of Bulgaria*, New York/London 1968, chap. XII. N. Oren, *Bulgarian Communism*, New York/London 1971, chap. II. 邦訳『ブルゴロフ選集』第三卷、一一九—一二〇頁。
 (24) B. Boshkowitzsch, KI, X. Jg. H. 4 (23. Jan. 1929), S. 197-199.
 (25) EKKI, *Inprekorr.*, 9. Jg. Nr. 11 (5. Feb. 1929), S. 202. B. B—witsch, *Inprekorr.*, 9. Jg. Nr. 4 (11. Jan. 1929), S. 73. B. B—witsch, *Inprekorr.*, 9. Jg. Nr. 10 (1. Feb. 1929), S. 175.
 (26) *Kommunistische Balkanföderation*, *Inprekorr.*, 9. Jg. Nr. 39 (7. Mai 1929), S. 930.
 (27) *Inprekorr.*, 9. Jg. Nr. 119 (31. Dez. 1929), S. 2775.
 (28) *Mannischi* (X. Plenum des EKKI), a. a. O., S. 1873.
 (29) *Die KI. vor dem VII. Weltkongress*, Moskau/Lenin-grad 1935, S. 402-403.
 (30) G. Dimitrow, *Inprekorr.*, 8. Jg. Nr. 137 (7. Dez. 1928), S. 2728.
 (31) S. Horia, *Inprekorr.*, 9. Jg. Nr. 109 (22. Nov. 1929), S. 2580.

(12) G. Lukács, *Demokratische Diktatur* (Hrsg. v. H. Benseker), Darmstadt/Neuwied 1979 (邦訳『ルカーチ初期著作集』第四巻、三番房、一九七六年)。
 (13) Béla Kun, L. Magyar, KI, X. Jg. H. 13 (27. März 1929), S. 745H.
 (14) Offener Brief an die Mitglieder der KP Ungarns, KI, X. Jg. H. 44 (13. Nov. 1929), S. 1656-65.
 (15) KP. Ungarns, *Inprekorr.*, 10. Jg. Nr. 78 (16. Sept. 1930), S. 1949-50.
 (16) 英国王室国際問題研究所、前掲書、木戸翁『ベルカンの現代史』山川出版社、一九七七年。H. Seton-Watson, *op. cit.*
 (17) G. Dimitrow, KI, IX. Jg. H. 43 (24. Okt. 1928), S. 2625-28 (邦訳『レーニン選集』第一巻、二五四—二五七頁)。
 (18) 前掲拙稿「四」一一三—一一四頁。
 (19) 『レーニン選集』第一巻、二五七頁。
 (20) Mannischi (X. Plenum des EKKI), *Inprekorr.*, 9. Jg. Nr. 79 (20. Aug. 1929), S. 1872-73.
 (21) *Protokoll des Vierten Kongresses der KI*, Hamburg 1923, S. 1017 (村田陽一編訳『ミンデルン資料集』第二
 (32) KP. u. KJV. Rumaniens, *Inprekorr.*, 10. Jg. Nr. 53 (24. Juni 1930), S. 1186.
 (33) Horn, KI, XIII. Jg. H. 7 (10. April 1932), S. 408-409.
 (34) 英国王室国際問題研究所、前掲書、一九二頁。
 (35) *Kommunistische Balkanföderation*, *Inprekorr.*, 10. Jg. Nr. 6 (17. Jan. 1930), S. 100.
 (36) *Die KI. vor dem VII Weltkongress*, S. 420.
 三 「中進国」における「中位D型」の擡頭
 —スペイン、ポルトガルの場合
 「スペイン」スペインは、かつてマルクスが、一九世紀の五次にわたる革命の過程で、「すべての封建諸国家のなかで最初に、しかも最も純粋なかたちで絶対君主制が成立」しながら「中央集権化が一度も根をおろすことができ」ず、「ヨーロッパの絶対君主制一般と表面だけが似かよっているが、むしろアジア的統治形態と同一の部類に入れるべき」と特徴づけた国である。⁽¹⁾
 二三年九月にイタリヤ・フランスの政權掌握の影響を受けてクレータにより成立したフリモ・デ・リヴィエラ将軍の独裁を、小党スペイン共産党は、第六回世界大会

りわけ注目し、後の第七回世界大会に通じる「フランス人がプロレタリア独裁のみによっておきかえられるわけではなく、ブルジョア民主主義によってもとてかられうる」という発想を導き出すのであるが。

こうして、ミンテルンから何らの重要な指導を与えられないまま、当のスペイン共産党の側は、この拡大幹部会総直後のバソナ党協議会で、スペインの「革命的情勢」を認識し、党内の一部に残る「民主主義的支配への到達という幻想」を「右翼的偏向」として退け、国内の現実政治が「君主制存続か共和制への移行か」をめぐり激動しているさなかに、「共産党の独自の指導的役割」を「証明」するために、「第三の解決」として「プロレタリア独裁」をめざす武装蜂起の準備に入り、三二年四月二日の総選挙により共和派が勝利しアルフォンソ三世が国外に亡命するという「無血共和革命」の決定的な局面において、大衆から全く孤立したまま、「共和制打倒」スローガンしか掲げないという悲劇的な結末を迎える。

三二年四月には「中進国革命」論の次の局面——いくつかの国々での「中位型」の復活ないし確立

前後には「フランス独裁」と規定し、「軍事独裁」規定と併用していた。二九年八月の第三回党大会は、「右翼的偏向との闘争」を強調し、「君主制打倒」を主要スローガンに共和制樹立をめざすスペイン社会党を、「社会フアンスト」として当面の主要敵としたが、同時に、「スペインには、すべてのヨーロッパ諸国の中で最も遅れた経済形態と封建的諸関係が、近代資本主義的経済形態と併存している」という認識をもとに、一応「中位型」戦略による「労働者農民政府」スローガンをかかげ、「絶対主義的神権的君主制を逐見るあらゆる半封建的勢力——君主制、軍国主義者、貴族層、聖職者」との闘争も顧慮して⁽⁴⁾。

しかし、世界恐慌のスペインへの波及の中で、國王アルフォンソ三世と軍部から孤立したアリス・デ・リヴェラ將軍が三〇年一月に失脚・退陣してペンゲル政府に移行すると、ミンテルン内では、この「独裁の危機」をめぐって異なる二エクスが現われる。

ソ連邦共産党機関紙「アラウタ」は、「資本主義政權内の新しいグループ化」とあつまり片づけ引き続き「労働者農民政府」スローガンとスペイン共産党の「多数者

——において重要な役割を果たすのは、このスペイン共産党の悲喜劇の教訓であった。

「ポルトガル」同様な傾向は、一九一〇年の共和革命後に幾度もクレータがくり返され、スペインと同じく後進的経済構造を持つポルトガルにおいても、見出された。ホルトガル共産党は、二六年五月の軍事独裁樹立から三年のサラザール政樹立にいたる過程を「イギリス帝国土義に従風したフランス独裁」と捉え、後に自己批判されていくところによると、「党は、ポルトガル革命の性格について正しい立場をとることができず、國の後進性や封建遺制の多様な諸形態を顧慮することなく、長年にわたってプロレタリア独裁のスローガンをかけてきた」のであった⁽⁵⁾。

以上に概観してきたように、一九二八年九月のコミンテルン「世界綱領」で「中進国」と例示された諸國の共産党は、一九二九年から三一年春にかけて、コミンテルンのいわゆる「第三期」革命の高揚「論が世界恐慌勃発によりいよいよ高調してくるなかで、また、「右翼的偏向との闘争」により何らかの「民主主義」闘争に言及す

獲得」の必要を説いたが、ドイツ共産党機関紙「ローテ・フラインネ」は、スペインを「世界フアンスト」の最も弱い環」と注目し、「アリス・デ・リヴェラの失脚は、フアンスト独裁政治の完全な破産の第一の实例」「スペインの实例は、フアンストを力により打倒しうる唯一ありえないこと、フアンストを力により打倒しうる唯一の勢力は、労働者階級でありプロレタリアートの独裁であることを証明した」と断定する。

この問題は、三〇年二月のコミンテルン執行委員会拡大幹部会会議でもとりあげられる。マヌエルスキの主報告は、「スペインがプロレタリア世界革命の運命を決めるわけではない」と簡単にふれたのに対し、エルコリ「トリプテ」は、「革命的高揚の不均等発展」の視角からもっとスペインに注目すべきだ、と述べた。これに對するマヌエルスキの回答は、「共産党とプロレタリア革命」よりは、個々の部分的ストライキの方が国際労働運動にとっては大きな意義を持つ」というものであった⁽⁶⁾。ただし、翌年の共和制への移行（三二年四月革命）によって、マヌエルスキは、あらためてスペインにと

ることが直ちに「日和見主義」と断罪されかねない「鉄の規律」にもとづく「世界政変」への「権威的盲従」の雰囲気の中で、そのほとんどが「中位b型」戦略なしの「プロレタリア独裁」スローガンをかかげることになる。このことは、三一年四月のスペイン革命勃発の後、三一年夏のコミンテルン執行委員幹部会クシホネン報告で、ようやく批判的に言及されることになる。

「コミンテルン綱領は、スペイン、ポーツランド、バルカン諸国等のような国々における革命の性格について、きわめて慎重に述べている。即ち——『これらの国々のあるものでは、ブルジョア民主主義革命から社会主義革命への多かれ少なかれ急速な転化が可能であり、また他のものでは、ブルジョア民主主義的性質の任務を広範に伴うプロレタリア革命の型が可能である』

これらの国々のどこにおいてどちらの革命類型に直面しているかは、述べられていない。【ところが】これらの国々の共産諸党においては、革命の性質をおしなべて社会主義革命と干編一律に規定する傾向が、きわめてしはしは現われている。】

1930), S. 606-607.
 (9) *KI, XII, Jg. H. 17/18 (7. Mai 1931), S. 731.*
 (10) *G. Pét, Inprekorr, 11. Jg. Nr. 34 (14. April 1931), S. 873.*
 (11) *Die KI, vor dem VII. Weltkongress, S. 306-307.*
 (12) *O. W. Kuusinen, KI, XII, Jg. H. 27 (23. Juli 1931), S. 1222.*

四 「中位b型」としての「三一年政治テーゼ草案」かくして、一九三〇年半ばには、日本は、「世界綱領」中の「中進国」とみなされ、しかも、その「中進国」と例示された諸国の共産党は、おしなべて社会主義革命戦略「中位b型」を採っていた。猪俣流にいうならば、スペイン、ポルトガルのような国においてさえ、である。三〇年八月のプロレタリアン第五回大会後に設置されたコミンテルン日本委員会の新テーゼ草案が、サフラン、ヤ・ヴォルク共に「中位b型」であったのは、当然であった。このうちヤ・ヴォルク草案の内容が紺野与次郎、風間文吉の帰国に際し持ちこまれ、翌三一年一月から、日本支部「日本共産党は「ブルジョア民主主義

- 140
- (1) *Karl Marx-Friedrich Engels-Werke, Bd. 10, S. 439*
 - (2) 例えは、Kercoff, *Inprekorr, 8. Jg. Nr. 16 (17. März 1928), S. 345.* なお、斎藤孝編『スペイン・ホルトガル現代史』山川出版、一九七九年、同『スペイン内戦の研究』第一編 中央公論社、一九七九年、G・ブレナン(鈴木敏郎)『スペインの迷路』合同出版、一九六九年、H・トマス(斎藤孝七訳)『スペイン市民戦争』I、みすず書房、一九六二年、参照。
 - (3) *Die Kommintern vor dem 6. Weltkongress, S. 300.*
 - (4) *M. Garlandi, Inprekorr, 9. Jg. Nr. 80 (20. Aug. 1929), S. 1904.* Mont-Fort, *Inprekorr, 9. Jg. Nr. 13 (8. Feb. 1929), S. 47.* K. P. Spatiens, *Inprekorr, 9. Jg. Nr. 86 (6. Sept. 1929), S. 2100.* D・イバルリ編(狭山・石井・藤江訳)『スペインにおける戦争と革命』第一巻 青木書店、一九七三年、三六—三七頁。
 - (5) *Prawda, Inprekorr, 10. Jg. Nr. 13 (4. Feb. 1930), S. 306.*
 - (6) *Rote Fahne, Inprekorr, 10. Jg. Nr. 11 (31. Jan. 1930), S. 247.*
 - (7) *Erweitertes Präsidium des ERKI, Inprekorr, 10. Jg. Nr. 37 (29. April 1930), S. 839.* F. Claudin, *The Communist Movement, Penguin 1975, pp. 210 ff.*
 - (8) *R. Flores, Inprekorr, 10. Jg. Nr. 25 (14. März 1930), S. 1222.*

的任務を広い範囲で擁護するところのプロレタリア革命」を戦略にかかげ、四一六月には「三一年政治テーゼ草案」を発表する。⁽¹⁾

猪俣建南雄は、この日本支部「日本共産党の戦略転換に、論争勝利を宣言し、「戦略的正統性」が「国際的権威」によりくつがえされた「プロレタリア科学」の側は、野呂栄太郎さえもが「組織的正統性」のレベルで反論せざるをえない局面を迎える。そして、『赤旗』紙上では、次のようにして「二七年テーゼ」も清算される。

「一九二七年七月テーゼ起草の当時にあっても……今日の規定〔中位b型〕が正しい規定であって『ブルジョア民主主義革命からプロレタリア革命への急激な転化』と云ふ規定は正しくない。何となれば、国家権力は一九二七年から一九三一年の間に一の階級から他の階級に移ったであろうか。何人も言下に否と答へざるを得ぬ。……コミンテルン第六回大会がこの規定〔中位b型〕に到達したことはコミンテルンのマルクス主義的偉大さをも一度明白に吾々に示したものであつて実に画期的事件ではあるまいか。」⁽²⁾

しかし、この「国際的権威への忠誠」は、いま一度裏返し

銀行が産業資本に対して行う前貸の区分に関して、マルクスが『資本論』において如何なる規定を与えたのか、という点をめぐって従来さまざまな解釈が出されてきたが、マルクスが次の区分の視角を提示しているという点⁽¹⁾は、これらの相異なる諸解釈の大方が認めている。すなわち、それは、資本の前貸と貨幣の前貸との区分は、借手が前貸を通じて追加的資本価値を入手するのか、あるいはたんに貨幣形態を得るだけなのか、という相違によって規定されるとする視角である。私見もマルクスがこの視角を提示していると考えるが、小論はこの視角のマルクスの「前貸」論全体の中における位置付けを直接に

第一節 問題の所在

与えようとするものではない。小論は、この視角を与えらる資本の前貸と貨幣の前貸の区分がもつ再生産論上の意味は何か、また、産業資本の再生産と銀行の前貸が如何なる関係にあるのかを説明しようとするものである。従来、この問題についていくつかの解決が試みられているが、いずれも説得的ではない。まず、エンゲルスはこの視角を銀行の貸出形態の相違に対応させて単純に内容規定している。すなわち、資本の前貸は人的信用による無担保貸付であり、貨幣の前貸は担保貸付であるとして、さらに手形割引は「純粹の虚質」であるとして⁽²⁾いる。しかし、この見解は、産業資本の再生産との関連分析の視角であり、専ら貸出の形式的区分による問題の解決であり、そこに難点がある。たとえば、担保貸付の

資本の前貸と貨幣の前貸に関する一考察

木村 二郎

切られることになる。コミンテルンの側は、一九三二年春から夏にかけて、とりわけスペインにおける「無血共和革命」(三年四月)の経験にかんがみて、「中進国革命」戦略の全般の再検討に入り、一九三二年には、スペイン、ポルトガル、ルーマニア、ギリシャ、エジプト、中位型⁽³⁾において、「中位型」が復活される。また、「中位型」に留まるポランド、ハンガリー、ブルガリアについても、その「ブルジョア民主主義的性質の任務を伴う」ことが強調される。日本についても、その一環として、三年九月の瀋陽事変勃発時には「三年型」の方向が明確になる。『赤旗』が、「三年政治」草案にもとづき「立憲君主制」や「フランス独裁」を真剣に討論しているころ、コミンテルンの側は、スペインにおいて崩壊したフリモ・デ・リゲラ独裁体制を「半絶対主義的半封建的君主制」と再解釈し(三年秋、第二回執行委員総会ウラタド演説)、ルーマニア共産党には「半封建的帝國主義的君主制」(第五回党大会、三年初頭)、日本の天皇制については、かつて一九年のユーゴスラヴィアにも与えたことのある「絶対主義的君主制」(クレーシネン幹部会報告、

三年三月)規定を与える。わが国論壇の「中進国論争」は、コミンテルンにおける、一九二九年春の「中位型」の擡頭、三年春一三年の「中位型」一部復活、の後を追いかけたがら、三年五月の「三年型」発表(邦訳は七月)によって、ようやく本格的な「日本資本主義論争」⁽⁴⁾「封建論争」へと、転変していくのであった。(1) 以上について、五十嵐前掲論文の他、風間文吉『非併時』共産党『三書房』一九七六年、紺野与次郎『風俗』野呂栄太郎『没落への転向期に立つ理論家—猪俣氏の「反批判」の再批判』中央公論『一九三二年五月』、『野呂栄太郎全集』下巻、新日本出版社、一九六七年所収。(2) 『赤旗』一九三二年一月一日。(3) 『赤旗』一九三二年一月一日。(4) 『赤旗』一九三二年一月一日。(一橋大学専任講師)

堅実・純粋な“感性”

一橋大学

社会への関心が高い
「問題意識」の強い学生が集う

写真 ● 宮崎明子



一橋大学大学院
社会学研究科教授

加藤哲郎

TETSURO KATO

1947年生まれ。東京大学法学部卒。
専門は政治学・比較政治。主な著書に、「国境を超えるユートピア」(平凡社)など。

加藤ゼミOB約300人中、 60人がマスコミへ

加藤哲郎教授の社会学部のゼミは、一橋大学の中でも数多くのOBをマスコミに輩出していることでつとに有名である。しかしその研究内容はマスコミではなく政治学。なぜ、加藤ゼミの学生はマスコミ就職に強いのだろうか。

「本当のところは私にもよく分からないんです。もっとも、ゼミの1期生(80年卒)から時事通信のデスクとNHKの論説委員が出ているので、流れは最初からあるんですが。ここ5年ぐらいはグローバル化を大きなテーマに“世界を見るときの切り口”を中心に教えていますので、マスコミ志望者がそういう勉強をしたいと思ってくることはあるかもしれません」

これまでのゼミのOB約300人のうち、新聞社

と放送局で50人、広告や出版を含めて60人ほどがマスコミに入っている。

重要なのは “世界を見る目”

「私自身は、マスコミ志望者も含め就職指導はしない、というのを“公約”にしてるんです。その代わり、20年ほど前から、ゼミの夏合宿で“就職戦線参戦記”といって、内定が決まった先輩が、就職活動の体験を後輩に伝える会を自主的にやっています。あとは、OBが大手マスコミ各社にいますから、後輩たちが話を聞きに行くことはできます。しかし、一所懸命OB訪問をしたところで就職できるわけじゃないので、人脈は直接の関係はないでしょう。むしろ社会や政治に対する関心のあり方やそれを分析する手法など、先ほども言ったように“世界を見る力”を教えていること、さらに、さまざまなテーマを元に討論する訓練をきっちりさせていること、この点が評価されているのではないかと思います」

他の多くの大学では広告業界や民放局に人気が集まる傾向があるが、同ゼミではNHKと新聞社を目指す学生が多い。

加藤ゼミの4年生で、NHKの制作に就職が決まった西真利子さんも、民放を受ける気は全くなかったと語る。

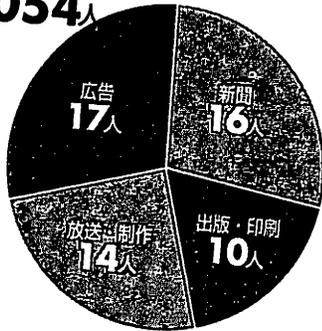
「テレビ局はNHKしか受けてないんです。NHKにはもともと好感を持っていました。民放に比

一橋大学のマスコミ就職状況

総人数

1054人

2004年度卒業生(学部生のみ)



※一橋大学調べ
(自己申告のみで集計)

一橋大学出身の主なマスコミ人

篠田博之(経済学部)

月刊「劇」編集長、創出版代表。

杉山隆男(社会学部)

読売新聞記者を経て、ノンフィクション作家。

石原慎太郎(法学部)

作家、東京都知事。

田中康夫(法学部)

作家、長野県知事。

倉田真由美(商学部)

漫画家。「くらたま切り捨て御免!」(講談社)など。

べ堅いイメージもありますが、NHKに就職している先輩に話を聞いたところ、やはり自分のとことんこだわる性格に合っていると思ったんです。民放の番組制作はいろいろ分担するようですが、NHKのディレクターは最後まで自分が責任を持って番組にかかわれると聞いて決めました」

硬派で社会派
報道の道を選ぶ卒業生が多い

たとえば、フジテレビに入れるんだったら制作でも経理でも人事でもどこでもいい、と口にする学生をよく見かけるが。

「うちの大学では、そういう声は聞いたことがないですね」(西さん)

報道記者を目指していた4年生の大山雄介さんも、やはりNHKへの就職を選んだ。

「どこが自分のジャーナリストとしての資質を磨いてくれるかと考えたときに、環境としてはNHKが一番恵まれているんじゃないかと。実際に、各局のニュースを比べてみたときに、いちばん真面目に丁寧に取材していると思うんです。一橋の学生は他の大学と比べて真面目なんです。堅実というか、純粋な感じの人が多。だからNHKに行きたくなるのかなと思います」

加藤教授も、「たとえばフジに行ってバラエティを作りたいという学生は、私のゼミには来ないですね。フジや日テレに入った学生でも、硬派で社会派のニュースを担当するパターンが多いです」



加藤教授の研究室で就職について語る大山さん(右)と西さん(中)。

と証言する。

就職予備校に通う学生はほんの一部

これだけ真面目に熟くジャーナリストを志向していても、一橋大学の学生は就職活動に関してはおっとりしている。いわゆる就職予備校的なところに必死に通ったり、セミナーに足しげく顔を出したりする学生は少数派だ。

同大学就職支援室の赤塚千幸さんは言う。

「他の業界と同じように、業界説明会や就活体験報告会などを行っています。とくにマスコミ業界だけに力を入れてはいません」

それでも一橋大学には、マスコミ志望者、中でもジャーナリスティックな感性をもった学生を引き寄せる何かがあるのである。